
隠人（おに）使い< 5 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠人使い<5>

【Nコード】

N5137N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

土御門 綾の周りにいる誰かがナイト・メアと『契約』している。
それは誰か . . .

隠人使い 5話目です。

五（前書き）

相変わらず眠いです。。。

五

翌朝、登校するとグラウンドの脇に、井上 遙の姿があった。

遙は、綾に気付くと、

「土御門君！」

笑顔で、彼に走り寄って来た。

「おはよう！」

明るくそう言う。

「・・・・・・」

綾は何も答えず、白いシュシュを付けた彼女の顔をじっと見つめたままだった。

「どうしたの？土御門君。」

小首を傾げてそう問いかける彼女に、

「どういっつもりだ。」

綾は冷たく言い放った。「ナイト・メア。」

彼の言葉に、

「えへっ！」

遙は「・・ナイト・メアは赤い下をちらっ、と出し、」もうバレちゃった？」

「何が目的は知らないが、お転婆はもうやめろ。」

と、右手に持つ竹刀に力を込めた。

「さもないと」

「判ってるわよ、綾。」

遙の姿でくすくすと笑うナイト・メア。

「ちよつと現世うつしよに遊びに来ただけよ。貴方の顔も久しぶりに見たかったし。」

「余計な御世話だ。」

綾は目を細め、「早く晴明神社（父の所）へ帰る事だな。本気で、父さんを怒らせたくなかつたら。」

「西の京は貴方のお父さん。東の京は綾、貴方が守る。」

「……」

「どういう意味か判って？綾。」

くすり……とナイト・メアが笑う。

「……失せる。」

綾はきつい口調でそう告げた。

「いいけど。」

ナイト・メアは気にした風もなく、頭の後ろで腕を組み、「貴方のお父さんが言った意味と貴方が東京へ来た意味、良く考えなさい……あら、『本物』が来ちゃった。」

綾の目の前で。

井上 遥の姿は白い鳩に変わり、天空へと飛び立った。一瞬の出来事である。

「綾！」

「土御門君！」

登校している生徒の中で、ただ一人グラウンドに立ち尽くす彼の姿に気付いた、望と遥は彼の元へ走り寄った。白い鳩が天空高く舞って行くのに少し気付いただけである。

綾はその鳩をじっと見つめていた。

「綾。」

紺のブレザー姿の望は彼の肩に手をかけ、

「昨日はごめん！俺、言い過ぎた。」

「私も。」

遥も彼の言葉に続け、「土御門君が辛い事あんまり知らない癖に偉そうな事言っちゃって。」

「……」

綾は望と遥を切れ長の目で見つめた。

ややあつて、

「俺と関わり合いになるな。」

一言、そう言った。

望は目を丸くし、

「やっぱ、怒ってる！？昨日の事。」

いつもと違う雰囲気の彼に気付き、「本当に俺、悪かったって思ってる！だからもう一度やり直そうよ。」

望は鞆をグラウンドの土の上に置くと、綾の両肩を掴みそう言った。

「その・・・私の事だけ。」

遙はちよつと引きこもりがちに、「私も、もう飯田先輩の事はいい。諦める。その、ナイト・メアとか言う人の事、解決する方が先だし、それで飯田先輩が救われるのなら、両想いにならなくてもそっちの方がずつといい！」

そして、一呼吸置き、「私も藤宮君と一緒に土御門君の力になりたい。」

「ただの人だけ。」

望は言葉を繋いだ。「何か出来るんじゃないかな。俺、そう思う。」

「私も、藤宮君と一緒に。」

遙は強い口調で、「私の夢の中に出て来た人気になるし、その人と私が何の契約をしたのかも気になる。」

「・・・。」

綾は再び、2人を見つめた。

春風が彼らを取り巻く。

「望。」

綾は静かにそう言うと、自分の竹刀を彼の目の前に差し出した。

「これをお前に預ける。」

「これ・・・って？」

望は目を丸くしながら、それを受け取った。
が、重い。

「重い。」

彼は素直に言った。その言葉に綾は微かな笑みを口元に浮かべ、

「それは土御門家に伝わる『龍王の剣』だ。闇は斬れても人は斬れない。」

綾の台詞を聴きながら、望は黒い袋の中身を確認した。そこには龍の時絵を施した銀色の柄を持つ剣。本物だった。

「え、え、ちよつとー！」

望は声を上げ、「俺、剣道なんかやった事ないよ！それにどうしてこれを俺に？」

「俺は授業中、眠るかもしれない。」

綾は答えた。「その時、俺を襲ってくる奴がいたら、そいつはナイト・メアと契約した奴だ。式神をこの学校のあちこちに配置してある。ナイト・メアはこの何処かの誰かの『夢』の中に潜んでいる……俺も夢の中から彼女を追う。外からは、望、お前が追ってくれ。式神は彼女がここから出られない様に配置させてある。」

「そんな大役。」

望は戸惑った。「俺に出来るのかな？」

「お前を信じてる、望。」

綾は言った。「だから手伝って欲しい。」

「私も、私も！」

遙が彼らの間に割り込み、「私もナイト・メアに会ったかもしれないから、何か出来るかも。」

「それじゃ、井上は」

視線を望から遙へと向けた綾は、「飯田先輩を守れ。」

「は？」

遙は目を丸くした。先刻、飯田との事は諦めると宣言したばかりである。

「でも、私本当に飯田先輩の事は……」

顔は真っ赤になりながら、遙が、「諦めたんだから、本当に。」

「力を貸してくれるって言ったる？井上。」

綾は微笑し、「だったら、井上は飯田先輩を守れ。それがお前の役目だ。」

「守れって言ったてねー。」

遙は教室に入りながら呟いた。「先輩とは休み時間に理由を付けて会うか、放課後の部活で会うかだけだし。」

溜息を付きながら、友達と挨拶をし、席に付く。「一体どういう事なんだろう?」

遙は席に着くと、いつもの様に赤い鞆から携帯を取り出しメールのチェックを始めた。

『この間のお店で放課後お茶しない?由美より。』

『最近付き合い悪いよ、遙。彼氏でもできたの(´・`・´)瞳。』

『今日も部活楽しみにしてるよ。』

「あ。飯田先輩だ。」

最後のメールは飯田からのものだった。

「やっぱり先輩じゃないよ、ナイト・メアにとり憑かれたの。」

そう、これといって部活中の飯田に変化は無かった。それは毎日マネージャーとして見ている遙には判っていた。

「だってナイト・メアにとり憑かれて契約した人は、その願いと引き換えに魂をとられちゃうんだもん。」

彼女は一人頷き、「先輩も元氣!私も元氣!そう、これは全部土御門君の勘違いよ、きつと。」

教室に入って来る生徒の数が増える頃、担任の国語教師が前の扉から姿を現した。

「こら!騒いでないで、授業を始めるぞ!」

生徒たちを制する。

キーン コーン カーン

授業開始を告げるチャイムが校内に鳴り響いた。

その一時間目のチャイムが鳴る前に、綾は2年B組の自分の席で寝てしまっていた。

「おいっ！綾！」

授業が始まる前に起こそうとするが、余程深い眠りらしく、一向に顔を上げない。

ナイト・メアが現れてからほとんど綾が寝ていない事は望も知っていた。

『夢の中から彼女を追う。』

そう言った綾の台詞も今は関係してるかもしれない。

望は足下に置いた龍王の剣をそっと眺めた。

『閻は斬れても人は斬れない。』

「いいのかあ、俺で。」

授業は始まってしまった。望は慌てて教科書を開いた。

結局。

綾は放課後まで眠ったままだった。

「綾。」

何度目かの声をかける。しかし、綾は起きる気配を示さない。

生徒たちが続々と教室を部活へと、帰宅へと去る中、綾と望だけが広い教室に取り残された。

「綾……」

望は溜息を付いた。今の所、綾を襲ってくる者はいない。半分、ほっと、していた。

「藤宮君、土御門君！」

隣の教室の井上 遥が室内に走り寄って来た。綾の様子を見つめ、

「何？まだ起きてないの？」

「うん。」

望は立ったままの彼女を見上げ、「1時間目からずっと。」

「そう……大丈夫かしら。」

「俺が付いてるから。」

「うん！」

「井上は部活だろ？早く飯田先輩の所へ行つて、綾の言った通り、先輩を守るんだ。」

「バック・ヤードで声援送ったり、水を運んだりするだけだけど。

「んー。」

望は困惑の表情の遙に頭を抱え、「とりあえず、それでいいんじゃない？俺は綾がいるからここから動けないけど、井上、とりあえずヨロシク頼むよ。」

「判ったわ。」

そう答えると、遙は手を振り教室を後にした。そんな彼女を見送りながら、

「綾の奴、どんな夢を見てるのかなー。．．．．．ってか、夢も見ない程寝てるかもしれない。」

望の呟きが彼ら以外誰もいない教室に響いた。

綾はそこでは小学3年生だった。

目の前には、祖母がいる。

「古来」

90歳を超えた祖母は優しい中にも厳しさを込めた口調で、「土御門家は安倍清明を祖とし、京を、その拠となる宮中を陰陽寮をもって守って来たもの。西の京には玄武・百虎・朱雀・青龍をもって、また東山には彼の和気清麻呂が死してなお將軍塚にて、千数百年の時をもって、京を鎮めている。」

「．．．．．」

祖母の言う事は良く分かる。でも、どうして自分に、という思いが綾の幼心を刺激する。

祖母は続けた。清明神社の離れの部屋で。

「元来、東にあつた鴨川。それを京を守るためその中心に変えさせたのも和気清麻呂の力によるもの。しかし、京は後白河法皇や邈れば奈良の都、藤原四家、特に恵美押勝（藤原仲麻呂）の恨みを抱いたままその恨みの根源でもある宮中と共に東へと移されてしまった。京自体、言ってみれば悪霊の系譜そのものだと言ってもいい。」

「だから……父さんはこの宮を引き継いだの？」

「そうじゃ。それが土御門の使命じゃ。陰陽を持って闇の者を制する。」

「俺もいつかそうなるの？」

「……」

祖母の脳裏に鬼と遊ぶ、綾の姿が映った。

祖母は続けた。

「東の京には、安倍の血を引く平将門がやはり数百年の恨みを抱いたまま闇の者を司っている。目に見えぬ戦は、むしろ西の京より東の京の方が重い。西の京の様に伝説や伝説に尊ぶ者も少ない。鎌倉時代より続いた宮中の陰陽寮も明治には排除されている。」

「……」

「己の心の中に潜む欲望が『彼ら』の糧となっている。」

「祖母様。何で、そんな話俺にするの？」

「お前が強い子だからだよ。」

祖母は初めて微笑を見せた。「綾。お前は父と共に2つの京を守護しなければならぬ。例え、どちらが先に死しても、死して尚、陰陽師として京を宮中を人々を守らなければならぬ。お前の父の相手が藤原家であるとしたら、綾、お前の相手は藤原家より『念』の強い、平将門だ。それを封じるのがお前の役目。」

口調は優しいものの、綾を見つめる眼差しは厳しい。

「土御門 綾。」

「はい。」

少年の答えに、祖母は傍らの剣袋を手にとった。

「これは、代々土御門家に伝わる、龍王の剣。この剣は闇を斬る事は出来ても人を斬る事は出来ぬ。」

そして、それを綾の目の前に差し出す。

「受け取るがいい。これからは綾、お前が土御門家の当主となるのだ。」

「……」

小さい綾は、その剣を冷たい眼差しでじっと見つめていた。そして、暫くしてからその剣に右手をかけようとした。その時。

「駄目だ。」

新しい少年の声が何処からか聞こえてきた。

「それは、父さんから引き継がれるものだ、綾。」

「誰。」

綾は声の方向に振り返った。そこには、長身の少年の姿。

「ナイト・メアと契約してはいけない。闇の力を使い過ぎると、やがて自分が闇に身を置く者となってしまうぞ。」

それは……高校2年生の綾。

小学3年生の綾は、高校2年の綾を見上げた。

「これは夢だよ。」

見上げる小さな綾にもう一人の綾は言った。

やがて、その視線を小さな綾から祖母へと向ける。

「俺を甘く見ない方がいい。」

祖母に向かって冷たく言い放つ。「俺は『父さん』から龍王の剣を受け取った。夢の中では時間は繋がっているのかもしれないが、その人の運命を夢の中で変える事は出来ない。」

「土御門 綾。」

祖母は……ナイト・メアは鋭い眼差しで高校生の綾を見つめた。

「……貴方だって小さい頃からずっと私と遊んで来たじゃない。」

「だが、俺はもう『あの時』の土御門 綾じゃない。」

「楽しかったじゃない！小さい時は！」

小さな綾を連れて彼女に背を向ける高校生の綾にナイト・メアは言った。「どうして戻れないの？あの頃に。」

「時が」

綾は軽く振り返り、「流れたから。」

「……………」

ナイト・メアはきつく下唇を噛んだ。「いつまでも貴方は私の物よ！」

放課後のグラウンドで。

飯田はストライクを連続して放っていた。

「がんばって飯田君！」

「がんばれ、飯田！」

観覧の女子生徒やチーム・メイト、果ては練習にも関わらず応援団まで飯田に声援を送っていた。

今日は今までと違ってかわって晴天である。

もう何球、飯田は投げたのだろう。

「大丈夫かな、飯田君。」

先輩マネージャーがそれを気にする。「水も飲んでないし。」

「ちよつと休憩入れる様にコーチに言ってみようか。」

そんな会話が交わされる中での出来事だった。

飯田がボールを放つと同時に、地面に倒れた。

五（後書き）

なんかもうラストに近づいてしまってます（次のネタっ!!）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5137n/>

隠人（おに）使い < 5 >

2010年10月8日23時53分発行